

研究ノート | Research Notes

『となりのトトロ』と考古学

“My Neighbor Totoro” and Japanese Archaeology

櫻井 準也

SAKURAI, Jun'ya

尚美学園大学  
総合政策学部教授

Shobi University

2019年9月

Sep.2019

## 『となりのトトロ』と考古学

### “My Neighbor Totoro” and Japanese Archaeology

櫻井 準也  
SAKURAI, Jun'ya

#### [要旨]

1988年に公開された『となりのトトロ』はわが国だけでなく、世界中の子どもたちに根強い人気を誇るわが国を代表するアニメ映画である。また、この作品の主人公の父親が考古学者であること、トトロの寝床に縄文土器があること、そして作品の自然観にわが国の縄文時代のナラ林文化や照葉樹林文化が影響していることなど、本作品には多くの考古学的要素がみられる。本稿では、作品の概要や父親のモデルとなったと思われる実在の考古学者について説明し、父親が所蔵する書籍や縄文土器などの映像分析を行うことによって、本作品と日本考古学との関わりについて指摘した。

#### キーワード

となりのトトロ、日本考古学、草壁タツオ、縄文土器、ナラ林文化、縄文農耕

#### [Abstract]

“My Neighbor Totoro” exhibited in 1988 is an animated film representing our country which is proud of deep-rooted popularity not only to our country but the children in the world. Moreover, many archaeological elements are seen in this work. For example, the father of the heroines of this work is archaeologist, and Jomon potteries are in the bed of Totoro. Moreover, the nara forest culture and the East Asian laurel forest culture of Jomon period have influenced the outlook on nature of this work. In this paper, I started with outline introduction of the work, and explained the archaeologist who became the father's model. Then, I pointed out the relationship with Japanese archaeology by analysis of the image of the father's books and the Jomon potteries etc, which appears in this work.

#### Keywords:

My Neighbor Totoro, Japanese Archaeology, Kusakabe Tatsuo, Jomon Pottery,  
Nara Forest Culture, Jomon Farming

#### はじめに

1988年に劇場公開された宮崎 駿監督のアニメ『となりのトトロ』は、子どもたちに人気の国民的アニメであり、公開後30年を経過した現在でもそのファンは多く、海外でも人

気である。しかし、誰もが知る人気のアニメ作品でありながら、この作品の世界観にわが国の縄文時代が関わっていること、主人公の父親が考古学者であることなど作品中に様々な考古学的要素が含まれている点についてはあまり知られていない。また、大衆文化（ポピュラーカルチャー）における考古学者像という観点からも『となりのトトロ』の父親は重要な存在である（櫻井2014）。わが国のアニメ作品においては父親が考古学者という設定は多くみられるが<sup>(1)</sup>、それらの中でも1980年代終わりになると、従来のような家庭を顧みずに遺跡の研究や調査、あるいは冒険に熱中する変わり者という父親像ではなく、家族を大事にする「やさしいお父さん」という以前にはない、世界的にも珍しい考古学者像<sup>(2)</sup>が登場するが、そのルーツと言えるのが本作品である。

本稿では、考古学の立場から父親のモデルとなったと思われる実在の考古学者について検討するとともに、作品中に登場する書籍のタイトルや縄文土器に似た土器の分析などを試みることによって本作品と日本考古学の関わりについて明らかにしてみたい。

## 1. 作品の概要

『となりのトトロ』（図1）は宮崎が原作・脚本・監督を務めたスタジオジブリ制作・東宝配給の劇場用アニメ作品で、1988年4月に公開された。上映時間は88分である。海外では香港・韓国・フランスなどで公開され、各国でビデオやDVDなどが発売されている。同時上映は『火垂るの墓』であったが、この2作品の公開にあたっては作品に派手さに欠けることや公開が中途半場な時期であったことなどから配給元の東宝宣伝部は宣伝に消極的だったという（叶2006）。しかしながら、本作品は興行収入5億8800万円のヒットを記録した。



図1 『となりのトトロ』  
（スタジオジブリ1988）

### 1.1 設定

本作品の舞台は一般的に埼玉県所沢市（狭山丘陵）であるとされているが、宮崎は「あの物語の舞台は、実はいろいろなところから取っているんです。聖蹟桜ヶ丘の日本アニメーションの近くとか、自分が子どものころ見て育った神田川の流域とか、今住んでいる所沢の風景とか、みんなまざっちゃったんです」と述べている（宮崎1988c、再録485頁）。このうち所

(1) 比較的古いアニメ作品ではロボットアニメの主人公の父親が考古学者であることが多い。『鋼鉄ジーグ』（1975・76年放映、日本教育テレビ）、『勇者ライディーン』（1975・76年放映、日本教育テレビ）、『魔境伝説アクロバンチ』（1982年放映、日本テレビ）、『巨神ゴグ』（1984年放映、テレビ東京）などの作品である。1990年代以降では、『カードキャプターさくら』（1998・99年放映、NHK）や『未来少年コナンII タイガアドベンチャー』（1999・2000年放映、TBS・日本アニメーション）などの主人公の父親が考古学者である（櫻井2014）。

沢市には作品で登場する「松郷」、隣接する東村山市には「八国山緑地」があり病院も存在している。また、カンタの家は宮崎が日本アニメーション在籍時に散歩した聖蹟桜ヶ丘周辺に実在した農家がモデルで小川の風景には宮崎が子どもの頃に遊んだ神田川流域の風景が混ざっているという（叶2006）。次に、時代設定については1953（昭和28）年説と1958（昭和33）年説がありインターネット上で議論となっているが<sup>(3)</sup>、宮崎は「それは2つのイメージボードからはじまった—宮崎駿インタビュー—」の中で「昭和30年といっているけれども厳密に調べたわけじゃない。みんなが共通に思っている“ちょっと前のこと”ということなんです。＜中略＞ただ、テレビを出さないということによって、ひとつの時代は出てくる。もうひとつは、プラスチックが出てこない。そのふたつだけは守ろうということにしていました」（宮崎1988b、433頁）と述べている。さらに、「トトロは懐かしさから作った作品じゃないんです」（インタビュアー池田憲章）においても宮崎は「テレビがまだない時代」の話であると述べたうえで、それを強調するため劇中でラジオドラマ「新諸国物語」<sup>(4)</sup>でも流そうかと思ったとも述べている（宮崎1988c、再録485頁）。これらの宮崎の発言からラジオドラマ「新諸国物語」において「笛吹童子」が人気を博した1953（昭和28）年頃という設定が有力ということになるが、そこまで厳密に年代を設定したわけではないようである。また、テレビがないという点では、この年がNHKテレビの本放送が始まった年であり、「テレビのない時代」という点ではギリギリの時代設定であったとも言える。一般にわが国の高度経済成長期が始まったとされるのが1954（昭和29）年末であり、1956（昭和31）年の経済白書に日本の戦後復興が終わり「もはや戦後ではな

- 
- (2) 「やさしいお父さん」としては、『カードキャプターさくら』（1998・99年放映、NHK）の主人公である木之本さくらの父親である木之本藤隆があげられる。藤隆は大学で考古学を教えている教員であるが、母親のいない子どもたちのことを常に気遣いながら家事もこなすやさしい父親である。これに対し、「やさしいお母さん」として考古学者が描かれているのが『ふたりはプリキュア Splash★Star』（2006・2007年放映、朝日放送）の主人公の母親の美翔可南子である。彼女は遺跡発掘に夢中であり、オッチョコチョイではあるが飾り気がないサッパリしたタイプの女性である。二人とも従来の漫画やアニメの考古学者イメージとは異なるやさしい父親や母親として描かれている（櫻井2014）。
- (3) 例えば、タツオの書斎のカレンダーが1955（昭和30）年、母親の病状についての電報の消印が1957（昭和32）年、母親の病室のカレンダーが1952（昭和27）年、1953（昭和28）年、あるいは1958（昭和33）年であるといった指摘である。また、当時の商品の発売開始年についても、冒頭のシーンで登場する三輪自動車ダイハツミゼットDKは1957（昭和32）年発売、バス停でサツキが使っていたジャンプ傘が登場したのが1960（昭和35）年で一般に使用されるようになったのは1961（昭和36）年以降であるとされている。様々なモノの製作年代が重要な研究対象である考古学研究者にとって作品の時代設定と実際の映像に登場するモノの年代の整合性は常に気になるものであるが、アニメ制作に限らず映画やテレビドラマの制作において使用する小道具が時代設定に合っているか年単位でチェックすることは通常ないと思われる。
- (4) 『新諸国物語』は1952（昭和27）年からNHKでラジオ放送された子ども向けの時代劇シリーズである。1953（昭和28）年の『笛吹童子』や1954（昭和29）年の『紅孔雀』は特に人気が高く、その後映画化された。

い」と記されて流行語にもなったことを考えると、この頃は都市部を中心にわが国の伝統的生活が現代的な生活へと変わり始めた時期であるが、いまだ昔ながらの生活が残る大都市の郊外が本作品の舞台として選ばれたということになる。これに対し、当時の東京を舞台として新しい時代の息吹や昭和のノスタルジーが感じられる漫画作品でその後アニメ化・映画化された西岸良平の『三丁目の夕日』（西岸1975）は、テレビや電化製品が普及する1955（昭和30）年から1964（昭和39）年にかけての高度経済成長期の下町が舞台となっており、本作品とは対照的な作品であると言える。

## 1.2 ストーリー

本作品の大まかなストーリーは次の通りである。

退院が近い入院中の母親を空気のきれいな場所で過ごさせるために、父親とともに田舎の一軒家（和洋折衷住宅）<sup>(5)</sup>に引っ越してきたのが小学6年生のサツキと4歳のメイである。オバケ屋敷のようなその家には「ススワタリ」（まっくろくろすけ）がいたが、父親はお化け屋敷に住むのが小さいときから夢だったという。メイは庭で2匹の不思議な生き物（中トトロと小トトロ）を見つけ、その後をつけると森の奥の洞穴にさらに大きなトトロが眠っていた。メイは大喜びでサツキと父親にこのことを話した。雨の日の夕方にサツキが傘を持ってバス亭まで父親を迎えに行くと隣でトトロもバスを待っていたが、しばらくするとネコバスが来てトトロはそれに乗って去っていった。そして、サツキとメイはトトロにもらったドングリを庭に蒔いたが、真夏の夜の風の強い晩にトトロたちがやって来て一瞬のうちに大木に成長させ、トトロは二人を抱いて野山を飛び回った。その後、父親が大学で講義の日に病院から電報があり母親の一時帰宅が延期になったことを知らされる。メイは病院にトウモロコシを届けに向かうが途中で道に迷ってしまう。サツキは村の人たちとメイを探すが見つからないので、トトロに助けを求めたところすぐにネコバスを呼びメイのいる場所へ連れて行ってくれた。ネコバスは二人を病院まで運んでくれたが、木の上から病室をのぞき母親の無事を確認したサツキとメイはお土産のトウモロコシを窓際に置いて家に帰った。

このように、本作品は戦後の日本に残る自然や伝統的な世界観を背景に幼い姉妹と家族の愛、そして奇妙な生き物たちとの交流を描いたファンタジー映画である。

## 1.3 登場人物

作品の中心となっている草壁家は娘の草壁サツキ（声：日高のり子）と草壁メイ（声：坂本千夏）、父親の草壁タツオ（声：糸井重里）、母親の草壁ヤス子（声：島本須美）で構成される。サツキは12歳（当初は10歳の設定であった）、メイは4歳、タツオは32歳という設定になっている。このうち、長女のサツキはしっかり者で活力のある魅力的な少女、次女のメイは寂しがりやである一方で頑固で忍耐強い子どもである。タツオは大学の非常勤講師をしている考古学者でヤス子とは学生結婚である。ヤス子は体が弱く、おそらく結

---

(5) この住宅は2005（平成17）年に愛知県で開催された「愛・地球博」の長久手会場で「サツキとメイの家」として再現され、その後も「愛・地球博記念公園」において公開されている。



核で七国山病院に入院中である。その他にも隣の農家の少年カンタ（声：雨笠利幸）、その母親（声：丸山裕子）と祖母（声：北林谷栄）などが登場する。また、人間以外のキャラクターとして、この国に昔から住んでいる生き物<sup>(6)</sup>であるトトロ（声：高木均）、中トトロ、小トトロ、そしてススワタリ（まっくろくろすけ）やネコバスが登場する。

## 2. 父親のモデルとなった考古学者

サツキやメイの父親である草壁タツオは娘たちを愛しており、お化け屋敷に住むのが小さいときから夢だったという子どもっぽさを残した人物である。仕事については書齋に本が多いため小説家であると思っている人が多いが、実際には考古学者である。しかし、タツオは当初から考古学者という設定ではなかった。1987（昭和62）年の「演出覚書」に「もの書きを職としている。一作目の成功で作家生活に入り、いま二作目の長編にとり組んでいる」（宮崎1996b、405頁）とあるようにタツオの仕事は当初作家という設定であった。これに対し、「準備稿」では「若い考古学者。大学で非常勤講師をやりながら、翻訳の仕事で生活している。今は革命的な新学説の大論文を執筆中。縄文時代に農耕があったという仮説を立証しようと週2回の出勤以外は書齋にとじこもっている」（宮崎1988b、415頁）となっており、短期間に設定が「作家」から「考古学者」に変更されたことがわかる。そのため、書齋には縄文土器の写真が飾られ、考古学や関連分野の書籍が乱雑に積まれている。また、タツオが外出する際に被っている帽子（布製のサファリハット）は、その当時の多くの考古学者がフィールドワークの際に着用していたものである。

タツオのモデルとなったとされる考古学者については諸説あり、森本六爾（1903～1936）、藤森栄一（1911～1973）、戸沢充則（1932～2012）、T.A.氏（1946～）がその候補としてあげられる。このうち、森本六爾は1903（明治36）年奈良県織田村（現桜井市）に生まれ、旧制畝傍中学（現畝傍高等学校）を卒業後、小学校の代用教員となり、1924（大正13）年に上京して東京高等師範学校の考古学者三宅米吉の副手となったが1929（昭和4）年の三宅の死後職を辞している。考古学研究会（のちの東京考古学会）を創立し、雑誌『考古学』を主宰して多くの考古学者を育成した。弥生時代研究を専門とし、現在では定説になっている弥生時代の稲作農耕についての学説を発表している。1936（昭和11）年に結核により若くして逝去したが、在野の研究者であり「考古学の鬼」とも称された森本は、松本清張の小説『断碑』（松本1972）の主人公木村卓治のモデルとなっている。

同じく在野の研究者で森本の薫陶を受けた藤森栄一は1911（明治44）年長野県上諏訪町（現諏訪市）生まれ、旧制諏訪中学を卒業後、上京して東京考古学会に入会する。1936（昭和11）年に葦牙書房を設立して森本の『日本農耕文化の起源』を出版した。1943（昭和18）年に出征し、1946（昭和21）年の復員後は故郷の諏訪で諏訪考古学研究所を設立

---

(6) トトロについては<演出覚書>で「森の中でのんびりくらし、ドングリを熱愛する。普段は人の目には見えないが、たまたま姿を見た者に、もののけと錯覚されたりする」（宮崎1988b、415頁）とある。また、インタビュー記事「トトロは懐かしさから作った作品じゃないんです」における「トトロも縄文人から縄文土器を習って、江戸時代に遊んだ男の子をマネしてコマ回しをやっているんでしょう（笑）」（宮崎1988c、再録501頁）という宮崎の発言からトトロが少なくとも縄文時代から生きており、それぞれの時代の人間と交流があったことがわかる。

し、発掘調査や執筆活動にあたった。藤森は多くの考古学者を育て1973（昭和48）年に逝去している。『旧石器の狩人』（1965）、『かもしかみち』（1967）、『石器と土器の話』（1969）など考古学の専門家だけでなく考古学愛好家にも大きな影響を与えた著書を数多く出版している。また、出土資料の分析から新たな学説である縄文時代中期の「縄文農耕論」を提唱し、考古学界で注目された。

戸沢充則は1932（昭和7）年に長野県岡谷市栄町に生まれ、戦後故郷で藤森の教えを受けた<sup>(7)</sup>。諏訪青陵高校（旧制諏訪中学）を卒業後、明治大学文学部に進学し、1961（昭和36）年に明治大学文学部専任講師、1968（昭和43）年に文学部助教授、1976（昭和51）年に文学部教授となっている。その後、明治大学の文学部長・学長を歴任し、2012（平成24）年に逝去している。専門は縄文時代や旧石器（先土器）時代で1976（昭和51）年に多摩湖遺跡群の調査団長となり、その後も多摩地方の遺跡の発掘調査団長を歴任し、2000（平成12）～2002（平成14）年には日本考古学協会の「前・中期旧石器問題調査研究特別委員会」の委員長を務めている。さらに、わが国の考古学界ではT.A.氏がタツオのモデルであるという説も根強い。T.A.氏は東京都生まれで都内の中学校元教諭、明治大学の非常勤講師を務めた人物であり、（財）トトロふるさと財団の理事でもある。考古学や縄文時代の概説書、武蔵野の縄文時代遺跡に関する書籍、さらにはわが国の考古学史に関する書籍など数多くの著書を執筆している。

これに対して監督である宮崎と日本の考古学の関係については、「風の谷のナウシカ」公開後で充電中であった宮崎が1984（昭和59）年の『平凡パンチ』の「日本人がいちばん幸せだったのは縄文時代」という記事において、自らの読書遍歴の中で考古学者の藤森栄一と植物学者の中尾佐助、さらに植物生態学者の宮脇 昭の著作が好きであると述べている点は注目される（宮崎1984、260～261頁）。この中で宮崎は藤森について、その著書『かもしかみち』（藤森1967）（図2）をあげ、この著作によって考古学が「一篇の美しい叙情詩」であることや藤森が縄文中期農耕の存在を指摘したことに感銘し、縄文時代がナラ林文化を背景として日本の歴史の中で一番安定しておだやかに生きられた時代であったと宮崎は述べている<sup>(8)</sup>。さらに、宮崎は照葉樹林文化<sup>(9)</sup>を提唱した中尾の『栽培植物と農耕の起源』（図3）（中尾1966）にも大いに感銘を受けており、これによって藤森の説が実証されたとまで述べている。そして最後に宮崎は「藤森、中尾って人は、歌舞伎とか能とかそんな衛生的できれいな日本とはちがった日本があったんだ、と教えてくれた」（宮崎1984、再録版262頁）と述べている。また、中尾の著作について宮崎は、1988（昭和63）年の「呪縛からの解放—『栽培植物と農耕の起源』」という文章で、自分にももの見方の出発点を与えてくれた一冊の新書として紹介しており（宮崎1988a）、同年のインタビュー記事「トトロは懐かしさから作った作品じゃないんです」でも照葉樹林文化について語り、

- 
- (7) 戸沢の恩師である藤森栄一に対する評価については、藤森の死後まとめられた論考（戸沢1974・1978）を参照されたい。
- (8) その後、宮崎は1996年の司馬遼太郎との対談「トトロの森での立ち話」においても藤森について言及している（宮崎1996a）。
- (9) 照葉樹林文化の提唱やその後の展開については、田畑久夫（田畑2003）や佐々木高明（佐々木2007）の論考を参照されたい。

中尾の著作が戦後日本の閉塞感から自身が解放される契機となったとも述べている（宮崎1988c）。このように藤森や中尾の著作が宮崎に感銘を与えたことによって、『となりのトトロ』の中に「ナラ林文化」を背景とした豊かな森や安定した食料資源としてのドンダリの利用にみられるような縄文的な自然観がこの作品に反映され、父親の職業も小説家から考古学者に変更されたと考えられる。

タツオのモデルについては、「準備稿」における「縄文時代に農耕があったという仮説を立証しようと週2回の出勤以外は書斎にとじこもっている」（宮崎1988b、415頁）という記述からタツオのモデルは藤森が有力ということになるが、タツオには藤森のような明治生まれというイメージはない。確かに黒縁の眼鏡がタツオと藤森の共通する特徴ではあるものの、当時のタツオの年齢が32歳であることを考えれば、タツオは1911（明治44）年生まれで藤森と1932（昭和7）年生まれで戸沢の中間の世代ということになる。これに対して、戦後生まれではあるが、都内の大学で非常勤講師を務め、専門が関東地方の縄文時代研究者であるT.A.氏も有力な候補となる。叶精二は「宮崎が尊敬する考古学者で縄文農耕起源説を唱えた藤森栄一の影響を反映された設定と思われる」（叶2006、115頁）と述べているが、以上の検討結果を考慮すると特定の人物がタツオのモデルとなっているわけではなく、タツオは藤森を中心にT.A.氏など複数の人物が重なり合っただけで出来上がったキャラクターであると考えられるべきである。

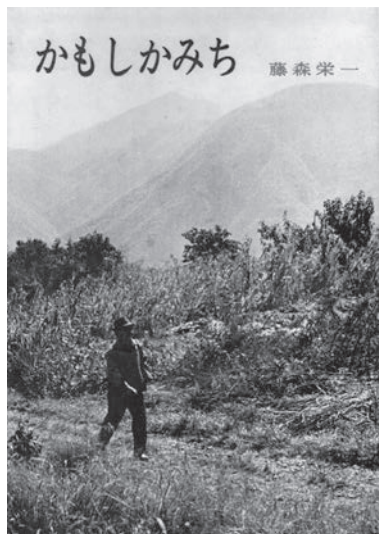


図2 『かもしかみち』  
（藤森1967）



図3 『栽培植物と農耕の起源』  
（中尾1966）

### 3. アニメ映像にみる考古学的要素

#### 3.1 タツオ所有の書籍

考古学者であるタツオが所蔵する書籍がどのようなものであるかについては、作品に登場する書籍の表紙や背表紙のタイトルを判読することによって知ることができる。以下でカットごと（宮崎1988b）にタイトルが判読できた書籍について紹介する。



### ①3Aカット

作品冒頭の引っ越しのシーンである。オート三輪車の荷台に紐をかけた書籍が積んである。向かって左側の束は『世界文学全集Ⅱ』『少年少女名作Ⅲ 小公子』『少年少女名作Ⅴ 三銃士』など子どもたちの書籍であるが、右側の束の背表紙に『○○古代史』『文化と風土』『土木出版 鉦物Ⅰ 佐藤○○』『土木出版 鉦物Ⅱ 佐藤○○』『関東地方の地○○』『写真大○○』とあることから考古学者であるタツオの所有する書籍であることがわかる。なお、鉦物図鑑は先史時代を専門とする考古学者の必需品である。

### ②279カット

タツオの書斎のシーンである。背表紙のタイトルが判読できる書籍は、左側の本棚では上の段から『○○古代』『日本○○』『コンティキ○○号』『奥羽山脈』『東北の古代史』『日本○○○』（3冊）『和英辞典』『アク・アク』『アイヌの○○○』（2冊）『現代国語辞典』『和泉の須恵器』『縄紋土器』『中国○○○』（2冊）『九州の○○○』、右側の本棚では上の段から『奥の細道』『関東地方○○』『武蔵野の歴史』『古代の食○』『古代の農○』『古代の狩猟』などと読める。

### ③280カット

同じくタツオの書斎のシーンであるが、本棚に背表紙のタイトルが判読できる書籍はないものの、机の上に『森と農耕』という背表紙の本が置かれている。

### ④283カット

書斎の机の上にメイが花を置くシーンであるが、開いた書籍に遺跡分布図らしき図版が見える。その隣に遺物の写真図版らしきものがあるがその遺物が何であるかは不明である。これが考古学の専門書であることは明らかである。

### ⑤373カット

タツオが書斎で原稿用紙に向かって原稿を書いているシーンである。ここでは机の上に『考古学』という表紙の書籍が置かれている。

### ⑥653カット

タツオが書斎で原稿用紙に原稿を書いている夏のシーンである。開いて見ている書籍のタイトルは『古墳○○』である。また、机の上に『纏向遺跡』『飛鳥』『○○辞典』、スタンドの下に『言海』（明治時代の国語辞典）が置かれている。背後の左側の本棚に『○○食文化』『食と○○○』、右側の本棚に『縄文の○○』（3冊）などと読める本がある。

## 3.2 作品に登場する縄文土器

次に、本作品には複数のシーンで縄文土器らしき画像が登場する。以下でカットごと（宮崎1988b）に紹介する。

### ①279カット

タツオの書斎のシーンである。メイを見送るタツオの背後、すなわち机が接してる壁の奥に飾ってある縄文土器らしき写真である。この縄文土器は明褐色の深鉢形土器で口縁に把手（4単位）があり、奥の把手のみ大形であるが形状は判然としない

(蛇をモチーフにしている可能性がある)。胴部全面に斜行沈線文が施文されているようであるが、その方向は中央の垂線を境に左右対称である。色調や文様から縄文時代中期の縄文土器のイメージに近い。

②280カット

同じくタツオの書斎のシーンである。メイを見送って立ったまま原稿に目を通し、その後座るタツオの背後（①の写真の反対側）に別の縄文土器らしき写真が飾られている。この縄文土器は暗褐色の浅鉢状の土器で口縁は6単位の波状になっており、胴部上半がくびれ「そろばん玉状」になっている不思議な形状である。胴部に縄文は施文されていないようであるが、縄文時代後期後半の縄文土器のイメージが反映されている可能性がある。

③342カット

メイがクスノキの根っこの穴から転落して着いたトトロの住みかのシーンである。中央にトトロの尻や尻尾が見えており、それをメイがぼんやり見ている。向かって左側に大小2つの土器が並んで置かれているが、右側のやや高い位置にある穴の中にも土器が1点置かれていることがわかる。

④367カット

342カットの3点の縄文土器のうち左側の2点がアップとなり、その中から中トトロと小トトロが顔を出すシーンである。絵コンテには「スミの縄文土器みたいな器の葉っぱのフタがもち上り 中トトロとチビトトロ メイをうかがう」とある（宮崎1988b）。このうち中トトロと小トトロが顔を出した左側の大きな土器は頸部がややすぼみ、口縁に向かって開く甕形土器である。口縁部の作りや色調、さらに胴部に縄文が施文されていない点は異なるが、全体の器形や頸部の一部に「工字文」に類する文様が施されていることから縄文時代晩期の大洞A式土器のイメージが反映されている可能性がある。さらに、右側のやや小形の土器は口縁に向かって開く深鉢形土器であり、全面に縄文が施文されていることが確認できる。器形や文様から縄文時代前期あるいは中期の土器のように見える。また、3点すべての土器の口部に大きな葉が掛けられており中は見えないが、これらがトトロが採集したドングリを収納する容器であることはエンディングで確認できる。

⑤653カット

タツオが書斎で原稿用紙に向かっている夏のシーンである。タツオの背後の壁に土器のような写真が飾ってある。下部に文字があるためポスターなどの印刷物である可能性があるが上部がカットされているため詳細は不明である。

このように、本作品に登場する「縄文土器のような器」<sup>(10)</sup>については、甕形か深鉢形の土器でその色調や形態からわが国の縄文土器のイメージが反映されている可能性が高い。ただし、それらは特定の縄文土器がモデルになったとは思われず、絵コンテにもその

(10) 「それは2つのイメージボードからはじまった」(宮崎1988b)の438頁に「トトロもね、縄文人から縄文土器をもらって、それにドングリを入れて、これは便利なものだっていって、ズーッと使っている」という宮崎の発言がある。

ような指示もないため、作画者が縄文土器をイメージして描いた創作であると考えられる。なお、タツオの所蔵の書籍も含め、これまで紹介したシーンの原画担当については、メイがトトロと出会う342カットおよび367カットのみ二木真希子氏であるが、残りのカットの原画担当者は不明である（叶2006）。

### 3.3 その他の考古学関連シーン

本作品には、その他にも次のような考古学に関連するカットがある。

#### ①671カット

ドンドコ踊りで芽を出したドングリの若い木をサツキが描いたスケッチ（着色されている）である。左から「クヌギ シラカシ コナラ マテバシイ」の順に描かれているが<sup>(11)</sup>、これらは縄文人が採集し、食料としていた落葉広葉樹や照葉樹のドングリである。芽を出したドングリを「ドングリ」として一括せずにその種類まで詳細に描いていることから、宮崎が「照葉樹林文化」や「ナラ林文化」を背景とした縄文の世界に傾倒していたことが窺える。

#### ②719カット

サツキが病院から電報を受け取り、大学で非常勤講師をしているタツオに電話をするシーンである。電話先が考古学研究室であることは「もしもし考古学教室ですか。父を、あの草壁をお願いします」（宮崎1988b、326頁）というサツキのセリフで確認できる。また、その大学が当時考古学教室が設置されていた大学であることや校舎の外観から、タツオの非常勤先は戦後の早い時期に考古学の専攻や考古学研究室が存在した都内の伝統校であることが想像できる。

### おわりに

以上示してきたように、わが国の国民的アニメ作品といえる『となりのトトロ』には多くの考古学的要素を確認することができる。具体的には父親が考古学者であることやトトロがドングリを収納している容器が縄文土器のようなものであることなどであるが、この背景には既に述べた宮崎監督の縄文時代への思いやその学説や生きざまに感銘した考古学者の影響があったことは想像に難くない。また、一般に本作品は懐かしさの感じられる子ども向けのファンタジー作品と認識されているが、本作品はこれ以外にも宮崎のこだわりが垣間見える作品である。1988（昭和63）年のインタビュー「それは2つのイメージボードからはじまった」で宮崎は「ぼくとしては、この作品のうしろに、日本の近代化論の理屈がこんなにいっぱいくっついているわけ。「トトロ」は、じつはいままで作った映画のなかで、いちばん理屈が多いんです」（宮崎1988b、438頁）と述べ、わが国の近代化に対する疑問から家族がトトロの住みかを探しに行くときに鳥居をくぐったり、立派な神社に

---

(11) クヌギ・シラカシ・コナラはブナ科コナラ属でクヌギは東北以南、シラカシは関東以西、コナラは日本全域、マテバシイはブナ科マテバシイ属で西日本を中心に分布している。ただし、絵コンテでは「シラカシ クヌギ コナラ（ミズナラから変更されている）」という順番になっている（宮崎1988b）。

手を合わせることによって明治時代以降の国家神道がイメージされることを避けたとも述べている。その意味で縄文農耕や照葉樹林文化・ナラ林文化という新たな考古学の学説との出会いによって戦後の閉塞感から解放されたと述べている宮崎にとって、考古学的要素が多く含まれる本作品が誕生したことは必然的な結果であったと言える。

## 参考文献

- 叶 精二2006『宮崎駿全書』フィルムアート社
- 考古学の道標編集委員会2014『考古学の道標—考古学者・戸沢充則の軌跡』新泉社
- 木原浩勝2018『ふたりのトトロ—宮崎駿と『となりのトトロ』の時代—』講談社
- 櫻井準也2014a『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社
- 佐々木高明1993『日本文化の基層を探る ナラ林文化と照葉樹林文化』日本放送出版協会
- 佐々木高明2007『照葉樹林文化とは何か』中央公論社
- 田畑久夫2003『照葉樹林文化の成立と現在』古今書院
- 戸沢充則1974「考古学における『地域研究』の方法—藤森栄一の仕事を通して」『信濃』26巻4号
- 戸沢充則1978「藤森考古学の現代的意義—通念に縛られた学問観の変革を求めて」『季刊地域と創造』5月号
- 中尾佐助1966『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 西岸良平1975『三丁目の夕日』（初出『ビックコミックオリジナル』1974年9月20日号より連載中）
- 藤森栄一1965『旧石器の狩人』学生社
- 藤森栄一1967『かもしかみち』学生社（初版は1946年発行）
- 藤森栄一1969『石器と土器の話』学生社
- 藤森栄一1970『縄文農耕』学生社
- 松本清張1972「断碑」『松本清張全集35』文芸春秋社（初出『別冊文芸春秋』43号、1954、原題は「風雪断碑」）
- 宮崎 駿1984「日本人がいちばん幸せだったのは縄文時代」『平凡パンチ』7月9日号、マガジンハウス庫（宮崎1996bに再録）
- 宮崎 駿1988a「呪縛からの解放—『栽培植物と農耕の起源』」『世界』臨時増刊6月号（宮崎1996bに再録）
- 宮崎 駿1988b『となりのトトロ絵コンテ集』徳間書店
- 宮崎 駿1988c『ロマンアルバム「となりのトトロ」』（宮崎1996bに再録）
- 宮崎 駿1996a「トトロの森での立ち話」（司馬遼太郎との対談）『週刊朝日』1月5・12日号（宮崎1996bに再録）
- 宮崎 駿1996b『出発点[1979～1996]』徳間書店
- 宮崎 駿（原作）・久保つぎこ（文）1988『小説となりのトトロ』アニメージュ文庫



